

容所に抑留

二十二年五月ナホトカ港から大郁丸にて  
舞鶴上陸、復員

平成十年七月、イルクーツク地方慰霊訪問団に妻を  
伴い参加し、五十二年ぶりに亡き戦友を埋葬したジマ  
を初め、チェレンホーボ、トゥルン、マラトボ、リス  
トビヤンカ等を墓参した。

現在イルクーツク地方復員者の会を組織し、シベリ  
ア抑留犠牲者、戦友会等の情報交換、親睦に尽力して  
いる。

(岩手県 田辺 壮久)

## 帰る日もくる 春が来る

岩手県 平田 玉男

遅い朝食後に「全員集合！」の命令。中隊長の顔色  
が悪い。「全員東の方の空に向かい（祖国日本）遙拝、  
捧げ銃」。ラッパが鳴り響く、皇御国の吹奏。  
すめらみくに

あちこちに誰が立てたか降伏の印の「白旗」がうら  
めしそうに風に揺れている。背中に水を入れられたよ  
うな、ゾクゾク身震いが起こる感じであった。とにか  
く、口には言葉が出てこない。

寝耳に水の「終戦の一報」である。誰もが信じられ  
ないようであった。隊長殿は、唇を震わせながら武装  
解除の伝達である。誰もが口を閉ざして、一瞬何も言  
わずにただ呆然としている。

我々日本軍は敗れたのか……。

やがて、今日まで我々と生死を共に暮らして来た武  
器は、直ちに集められて山積みとなる。隊長殿は、目  
を潤ませながら「武器に向かって敬礼！」

昭和二十年八月十五日を過ぎ、間もなくソ連軍の戦  
車やトラック等が押し寄せて来た。我々の前に来て、  
何かしゃべっている。言葉がサッパリ分からない。次  
に通訳と何か話し合っている。その間に鉄条網が張り  
巡らされてしまい、その中に隊長以下全員が入れられ  
た。ソ連軍の監視兵が見張る。我々は捕虜になったの

である。悔しきで、胸の中は張り裂けるような思いである。

隊長殿から天皇陛下のお言葉が伝達された。これからはソ連軍の指揮下に入る。一カ所に収容され、ソ連軍の監視を受けねばならぬ身となる。いわゆる天皇陛下のお言葉の「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び」である。世界の注目の的だった大日本帝国軍人、関東軍三百五十万の軍隊は、一瞬のうちにその姿を消したのである。

一カ所に集結された我々日本軍の部隊は、二千人ほどが一つの梯団となる。隊長殿の話によると、これより帰国の途につくのだ、全員元気で汽車の乗り場まで行軍との事。一步一步が故国日本に近づくのだと、元氣を取り戻して歩く。何処まで歩いたら汽車に乗せるのか、さっぱり分からない。足の裏にはまめが出来るばかり。

夜になると草原で野宿する。夜露で身体がびしょり濡れてしまう。明るる日も明るる日もただ歩き続けた。雨具の代わりに筵やゴザを背負い、雨が降ってく

るとそれを頭からかぶって歩く格好は、何とも口に言い表すことができない、まさに乞食の行列同様である。

ある日の野宿に、やれやれ建物のある所で泊まることが出来ると喜んだら、ソ連軍の攻撃で破壊され屋根のない建物だった。今夜は夜露に濡れずに寝ることが出来ると思ったが、期待外れでガッカリした。

ふと付近に屋根のある小屋を見つけた。行って見たら便所であった。「オーイ、屋根があるから来い」と叫んだら五、六人が走って来た。「ナインダ便所か」と誰かが言う。「贅沢言うな、屋根があるぞ、ありがたく思え」と笑いながら中に入って来た。案外汚くは感じない。折しも、暗くなると同時に小雨が降って来た。便所ではあるが、雨に濡れる心配がないのが何よりと、便所の仲間一同、ありがたしありがたしである。

一步一步が日本に近づくのだ。千里の道も一歩から始まる”という言葉を思い出し、胸に刻み心に言い聞かせながら、野を越え山を越え十日間歩く。約百二

十里（四百八十キロ）、祖国日本へ近づくのだという切なる希望を胸に抱き、ソ満国境を越えた。歩き続けてやっとたどり着いた鉄道の駅は、ソ連の「グロデコーボ」の町の駅だった。

この行軍の途中、激戦が繰り広げられたという磨刀石マキという所などは、目をつむるような惨めな光景である。ソ連軍との交戦で無残にも爆破された我が軍の戦車、銃砲等、さらに今は声なき戦友達の屍と、苦労を共にした軍馬の死体などが散乱していた。そこでは足を止め、一同冥福を祈って黙禱をする。更に歩き続ける。

武装を解かれた我々梯団の宿舎の外では、大黒柱の主人を戦争のため軍隊に駆り出されてしまった奥さん達数十人が、わが子を背負い、或いは手を引いたみすぼらしい姿で、「兵隊さんのそばに置いてください」と言いながら我々の宿舎の軒下にたたずんでいた。また、空き缶でジャガイモを炊いて子供に食べさせている奥さんもいた。我々捕虜兵も可哀そうだが、それにも増して可哀そうな哀れな姿この上なしである。聞く

ところによると、逃げ迷っているうちに子供と別れ別れになってしまった人もいるという。戦争の生んだ悲劇とでも言うのか。

「グロデコーボ」の駅でようやく汽車に乗ることができた。いよいよ船に乗るため「ウラジオストック」行きかと、皆の顔も心も日本行きの希望が大きく膨らみ、内心浮き浮きして元氣そうになる。

やがて、汽笛一声列車が走りだす。ところが北の方へ向かったようである。太陽も月も右の方から出てくる。おかしいなあと思った。誰かが善意に解釈して、「鉄道も曲がっている所もあるから、右手の方に見えることもあるだろう」と言う。そうかなあとうなずく。それでも気にしながら着いた所は、「グロデコーボ」より北の町「ウスリースク」であった。

隊長殿が言うには、船の都合でここで十日程待ち、その間ソ連国の手伝いをやるのだという。初めは信じていたが、十日も過ぎ、更に一カ月過ぎたにもかかわらず草刈りやら干草巻きで、冬を迎えてしまった。

草刈りの面積は、十人のグループで三ヘクタールが

ノルマだった。草巻きは五人で初めは三十巻きだった。そのうちに五十巻きと増やされる。それは、一生懸命やって少しでも早く終え、休む時間をつくらうとしたのが仇となった。日本人はいくら増やしても片っ端からやり遂げるようだとみたのか、更に増やして七十巻きとなった。腹が立ったがどうしようもない。

「ダワイ、ダワイ（速くやれ、速くやれ）」で急ぎ立てる。最後には何と、百巻きに増やされてしまった。

こうなったら我々も考えなければならぬ。そこで、いずれ百巻き渡せばよいのだから、今日の七十巻きに昨日の分から三十巻きを持ってきて百巻きにして渡す方法を考え、これが成功した。ちょっとずるい考えだが、そうしないと体が持たぬ。仕方がないのである。

食事と申せば、トロトロの粟のお粥が飯茶碗で一杯だけで、おかずなどなし。昼食は三百五十グラムの黒パンだった。足らない分はいつも水を飲んで我慢、我慢の連続である。いくら痩せても枯れても、この体だけは日本へ持って帰りたいの一念で頑張る。

七十巻きに昨日の分から三十巻き運ぶときの様子

は、今考えるとおかしなようだが、みな真剣である。ソ連人の監視の目を盗むのにひと苦労した。干草の巻きに縄を付け、体を低く腹ばいになりズスリ、ズスリと引く姿、全くおかしくもあり、情けなく感じたのである。故郷の親達には夢でも見せられない無様な姿でもある。

夕方宿舎に帰っても、相変わらずのトロトロのお粥が待っているばかり、腹が減っては寝付かれぬ。水を飲んでひと眠り。

やがて冬が訪れ十二月となる。出張作業ということである。満州にある日本軍の食糧をソ連領に運ぶ作業である。国境になっている河を渡るため、何もない原野の中である。早速宿舎造りに取りかかる。

深さ一メートル五十センチぐらいの縦穴を掘り、長さ三メートル程、屋根は木の枝を組み合わせて作る。枯れ葉で屋根を葺いた。五人一組で穴の中の生活をした。穴の中で焚き火をして暖をとる。外は氷点下三十度でも穴の中は案外暖かであったが、夜が更けるにしたがい冷えてきた。寒さで震えながら夜を明かすこ

と一カ月。

その間に、酒好きで秋田県出身の高橋伍長が、アルコール入りの缶を見つけ、酒の代わりに飲んで死亡した。その夜、乾燥した草などを集めて火葬したら、ソ連の監視兵にひどく叱られた。(ソ連では、火葬せずに埋葬すること。)「なぜ人を焼いた」とカンカンである。仕方なく通訳を通して、日本では、死んだ仏様は火葬にする、遺骨は大事にして祖国に持って帰り、家族へ渡すのだと説明して納得させた。

昭和二十一年の早春になって移動。今度こそは南に下がるだろうと思った。南下どころか、またもや北へ北へと列車は走る。“ハバロフスク”の町を通過した。“ウスリースク”を出発してから三日後、アムール川のある“コムソモリスク”という町に着く。

そこでの作業はいろいろであった。建築作業、セメント工場等。自分達の作業は鉄道工事作業だった。日本で言えば鉄道工夫の保線作業で、枕木交換とか線路の点検をする。冬になると除雪など、酷いのは機関車の脱線復旧の作業である。

収容所は、第十八収容所・第四分所(ラーゲル)

だった。良く働く者は“ハラシヨールポーター”として、大変喜ばれて案外良い待遇を受ける。二千人の収容者から“ハラシヨールポーター”のグループ十人組が二組選ばれた。青森県の川越グループと若手鼎盛岡の吉田組だった。この組は作業成績が良くて、月額百二十五ルーブル位の小遣いを受ける。ソ連人のカマンジール(監督)は、カワリョーフと言う高齢者で、人の良いロシア人であった。よく我々ハラシヨールグループを可愛がってくれた。

“コムソモリスク”の冬もまた厳しく、氷点下四十四度と気温が下がれば野外作業は中止となる。空気も凍り、靄でもかかったように見通しが利かなくなる。冷たいというよりもチカチカと痛さを感じる。耳たぶや鼻の先をまるでローソクの色のように白く凍らせた者もいた。当の本人は凍ったのも知らず、相手に知らされてビックリするありさまである。マツ毛が凍るし、鼻ヒゲもポリポリとなる。

夜間作業で貨車から石炭を降ろす作業に行った時、

貨車の上にあがって石炭を降ろしていた。他の仲間達は下の方で石炭をつつ突きながら降ろしていたのだから。足元にボックリ大きな穴が開き、体はその穴に入り「ズスッ」と落ち込んだと思ったら、貨車の下に落下してしまった。かろうじて貨車の下から這い出た。

作業係のソ連兵がびっくりして飛んで来た。カントーラ（休憩室）に自分を連れて行き、「怪我がなかったか」と心配そうな顔をしていた。

上から落ちてきた石炭で頭を少々打ったが、大した事はない。「大丈夫だ」と言ったが、彼は大事をとってか、「まあ、少し休んでおれ」と言いながら、ストープのある休憩室で作業の終わる夜中の二時ごろまで休ませてくれ、その夜はそのまま作業員と一緒に帰ったこともあった。

命をどうにか保てる程度の毎日の食糧で、我々の仲間達は飢えと寒さと重労働でお互いにどんなに苦勞したことか。体は日増しに衰弱した。ちょっとでも手などに傷をつけたら大変だ。なかなか血が止まらないのである。血の止まる力がなくなってきたのか。

寒い日の午後のことであった。貨車の入れ替えのため、仲間たちと一緒に貨車を力いっぱい押ししていたら、俺の鼻の中から血が流れ落ち、なかなか止まらないう。作業終了時間までカントーラで休んだ。しかし止まらない。夕食の時も、鼻の穴を塞いでようやく食べるという始末。

冷やした方が良いと思い、屋外の氷を取って来て一晩中何回となく取り替えた。朝になっていくらか落ちていたようだったが、それでも二日目も作業しながらいくらかずつ出た。そして三日日にやっと止まったのでホッとした。

やがて春になり、いくらか暖かくなってきた。やれやれと思つたある日の朝、作業に出かけるため支度をして外に出たら、どうも両足が重い。仲間と作業場に行くのも困難な状態であった。

これではいかんと思い、作業班長に体調の不良を申し出た。早速医務室に連れて行かれた。ソ連の軍医はこの俺を見てビクリ顔。どうしてこんなになるまで作業をさせたのかと、作業班長をカンカンになって

叱った。ただちに治療のため医務室に入室させられた。診断の結果は脚気だった。両方の足は下腿から脛の方まで腫れて丸々と太り、指で押すと指の跡が穴になって、一日中元通りにならなかった。

眠くて眠くて、食事も食べたり食べなかつたりした。三日寝たら、三日目の午後から少しずつ腫れも薄れてきた。それから日増しに回復して、一週間後にはお陰様で作業に出られるまでになった。ソ連の医師は、疲労と栄養不良からくる病気だと言っていた。

ソ連軍の日本人捕虜に対する朝の人員点呼に要する時間は、非常に長かった。千人位の点呼に約一時間費やしてしまう。人数計算の要領が悪いらしい。あまり面倒になると一人ずつチェックする場合があった。

日曜の外出の時に、ソ連人の老夫婦の家を訪れたりした。爺さん、婆さんのために新割りや風呂の水汲みを手伝い、食パン（黒パン）や煙草（マホルカ）などを頂いて帰ることもあった。手伝ってやれば老夫婦も大喜びで、俺達もまた気分が良かった。

ある時、ソ連人の爺さんがこんな話をした。昔の話

だが、ヤポンスキー（日本人）の軍隊がシベリア出兵（大正八年七月〜十二年十月、極東シベリアに日本軍隊派兵）した頃に、ロシアは非常に食糧不足であった。その時にヤポンスキーに助けられたという。日本軍の炊事場に入って残飯をもらって命をつないだ。たまには「また来たか、うるさい」と言いながらも、ピントを二つぐらいもらってから残飯をもらって帰った、あの時は助かった、と語ってくれる。また自分達に向こうに見える鉄橋を指さして、「あの鉄橋は、川岸はロシア人が作り、困難な川中の二つの鉄橋はヤポンスキー達が造ったんだよ、助けられたのはその時なんだよ」と語ってくれた。

いつもトロトロの粟かゆで、箸などいらぬ。中身はお茶碗に軽く一杯だった。腹の皮と背中がくっつくようである。昼食は三百五十グラムの黒パン一個で、もちろんおかずはなし。それでも入ソ二年目頃から朝夕は米のお粥になり、いくらかやれやれという気持ちになる。他人よりちよつとでも余計に腹の中に食べ物を入れたい時は、夕食後後片付けの手伝いや掃除に出る

と、夜食に夕食と同じ位のお粥が渡される。いくらか満腹感を抱いて帰り、床に就く。

冬の服装と申せば、夏物の肌着に、綿入れのロシア服の上下と毛皮(羊)のシューバ、毛皮の手袋で、親指のみ別についている袋のような物だった。長靴はフェルト製(カートンキー)で、帽子もロシアの防寒帽である。

我々がソ連に入った当時は、寒さを防ぐ防寒衣も手袋もなく、廃品の布きれを拾って手袋を作り作業に出た。特に印象に残るのは宿舍と寝具である。防寒設備のない作業小屋には何もなかった。寒さを防ぐために、乾いた草を集め、その中に潜り込み夜を明かした。まるで豚のようだ。乞食でもこんな有様ではあるまい。大日本帝国軍人の姿などとは思えない。毎晩、身を震わせながら夜の明けるのを待つ。耐え難きを耐え、忍び難きを忍びと、天皇陛下のお言葉を肝に銘じてがんばる。「我慢だ待ってろ 嵐が過ぎりゃ 帰る日もくる 春が来る」を常に口ずさみ、歯を食いしばって頑張り続ける。

ソ連に来て二年目頃から、片言交じりではあるがロシア語を覚え、ソ連人との日常会話が出来るようになり便利になった。また、ソ連人も日本語をいくらか覚え、話し合いも楽しくなってお互いの理解を深めていく。

ソ連人は万年筆や時計を非常に欲しがり、煙草や食パン等を抱えて交換にやってくる。ある時、交換してやった時計を持ってやって来た。「返します」と言う。事情を聞くと、時計が動かなくなっていた、故障だからいらないと言って、サッサと帰って行ってしまった。一昼夜巻きの時計なので、ネジを巻いたら動き出した。故障ではなかったのである。交換したパンは食べてしまった。仕方がない。ソ連人は帰ったし、結局はパンを食べた分は儲けたことになる。こんな事は、自分ばかりではなく、他にも度々あった。

昭和二十三年、ソ連に入ってから三回目の春がやってきた。三年目の冬が明けた春である。

コムソモリスク第二病院への入院命令が出た。痩せ



ているから病院に入院という事になったという。噂によれば入院するとダモイ（婦国）が遅れるという話も耳にした事もあるので、一応断った。しかしながら岩手県二戸出身の軍曹の話では、今度の入院は婦国のための入院で、体調調整と今までのラポート（労働）をした体の休養のためという話だ。軍曹の言う事を信じて入院を決意した。これまで何度となくだまされて来た我々なので、本当は信じられないような気もした。入院して二週間、仕事があるわけでもなし、体操したり遊んだり、寝たり食ったりの白衣の勇士である。

やがて婦国船が来たのか、二週間目になって婦国予定者名簿に『岩手県 平田玉男』という名前も載ったらしく、呼び出された。全く夢のようで信じられず、耳や頬をひねってみたが、本当だとみえて痛かった。皆嬉しそうに飛び跳ねて喜んだ。

入院二週間目の日、ダモイ（婦国）の当日である。婦国列車に乗り込むのに駅まで約二十分歩く。婦国者仲間と足取りも軽くダモイ列車に乗り込んだ。

我々が婦国者として呼ばれたとき、十人だけが呼ば

れない。残った十人はがっかりして元気がない。一定お先するが、間もなく後から来るだろうと勇気づけ、列車に乗った。

汽笛一声、列車は走り出した。『ガタン、ゴトン』と二十メートルか三十メートル位走った時、後ろの方から大きな声で何か叫びながら、ソ連兵が日本人の捕虜数人と共に走りながら追いかけて来た。幸い列車の運転手が気がついて静かに停止した。彼等も我々の列車と一緒に乗り込む仲間だったのに名簿の手違いで取り残された、自分らが病院を出る時残されたその十人の者達であった。あの別れた時がっかりして首をうなだれた仲間達は、顔色も良くなって、その列車に乗るとき速いこと。自分達もやれやれと胸を撫で下ろすひと場面もあった。

我々が乗る列車はいつも貨物列車である。目的地は、我々を迎えに船が着く『ナホトカ』である。今度こそは騙されるとは思えない。確かに南下している。出る太陽も月も左から出る。やっぱり婦国だ。

まるまる七年ぶりで祖国日本の土を踏むことが出来

る。案外体も壊さずに、耐え難きを耐えて頑張った。  
“父よあなたは強かった”のである。しかしながら、  
これもひとえに神仏のお陰と、異国の地に捕虜とな  
り、共に励まし力を合わせてお互いに助け合い、苦勞  
を共にした同じ仲間のお陰と思う。誠に有り難いこと  
である。

コムソモリスタ収容所を出発以来七日目に、帰国者  
の集結地であるナホトカ港に着いた。日本から船が迎  
えに来るまで二週間程待った。

作業があるわけでなし、退屈しのぎに経験のある者  
が十数人で地引き網を作り、ナホトカ港の海浜で地引  
き作業が始まった。漁獲未開の浜とみえて、穫れるわ  
穫れるわ、大漁だった。早速浜辺で食べ、また各炊事  
場へもやったりして喜ばれ、退屈をしのいだ。

帰国船に乗るまでの二週間は長かった。ナホトカ港  
に帰国のために集結した日本兵約一万人ほどが、各々  
の船の来るのを首を長くして、今か今かと待ってい  
た。

ところで、自分達がナホトカに着く前、同じ村の今

野長右衛門さんのグループは、ナホトカが満員で、仕  
方なく別の所へ出張作業に出掛けるという不運もあっ  
た。そのうちに引揚船が来て、先着グループがまず乗  
り込み、すぎができたところに我々がナホトカ入りし  
たのである。

首を長くして待った引揚船がようやく入港した。皆  
目を丸くして喜んだ。七千トン級の貨物船“栄豊丸”  
であった。

宿舎を出発して栈橋に集合したら、また途中まで戻  
された。「またも騙されたかな？」とガツカリ。しか  
し、宿舎には戻らずに途中で停止した。船が栈橋に着  
けないため、ハンケ（本船までの通り船）の都合とい  
うことで、やれやれとひと安心。

数十分後によく乗船が開始された。千人の乗船  
者だったが、一人ずつ数えながらハンケに乗せ、約一  
時間後に乗船が終了。

我々の乗船に先立ち、ソ連軍の陸軍中佐より別れの  
挨拶があった。日本語の達者な将校である。「長い間、  
日本のため、また入ソ以来本日までロシア国家のため

非常にご苦勞さんでした。帰国後もどうぞお元気で、日本再建のため頑張ってください。機会があったら、遊びにいらっしやい」と、大きな体の大きな手を振り、別れを惜しむ。聞くところによると、この日本語の達者な将校は、元日本留学生で、東京帝国大学卒業生であったという。挨拶の中で、自分は日本の東京で勉強した頃はいろいろとお世話になったと話していた。

「ポーツポーツ」と汽笛を鳴らしながら、我々を乗せた船は静かにナホトカ港を出港した。シベリアの大地、ナホトカの港ともお別れと思うと、三年の間の苦勞も忘れ、ただ名残惜しいような気もして、涙が少々こぼれた。棧橋では、後から帰国船に乗る見送りの仲間に交じって、ソ連の人達が盛んに手を振って見送ってくれた。

我々の小隊長である柳沢准尉殿は高齡にもかかわらず、よく我々を指揮しながら頑張ってくれ、感謝している。船の中で柳沢准尉殿は一声高く「オーイ皆、本日までよく頑張りが続けた。本当にご苦勞様」

と、何度も口にする。「准尉殿、よく我々のお世話をしてくださいました。本当に有り難うございました。厚く御礼を申しあげます」と准尉殿を取り囲む。お互いにうれし涙の顔・顔・顔……。

ナホトカ港を出港以来、三日間を海上で暮らした。船上（甲板）に出て、しばらく船長の話を聞く。船長が、間もなく着く故国日本の様子などをいろいろ話してくれた。「皆さん、日本に帰ってびっくりする感じがいくらでもあるよ。品物の不足やら、物価の高いことやら」。そして、笑い話のようであるがと前置きして、「この間、休暇でわが家に帰った。腹が空いたので飯を食おうと飯びつを開けたら、砂糖がいっぱい入っていた。びっくりして妻に聞いたら、お米の代わりに配給になったんですから、砂糖をなめなさいと笑いながら答えていたよ」と、話してくれた。

そんな話をいろいろ聞いているうちに、国内の様子も戦争の影響で変わったろうなあと、思うのであった。

六月二十日、我々を乗せた船は、静かに舞鶴港に入

港した。"今までシベリアで苦勞しながら働いた兵どもを積んで、今帰って来たよーッ"と知らせるよう  
に、入港合図の汽笛を鳴らしながら。

舞鶴の栈橋には、大勢の出迎えの人々が黒山のように集まって、「お帰りなさい!」と言いながら出迎え  
てくれた。初めて見る光景だった。

### 【執筆者の紹介】

生年月日 大正十年三月十日 岩手県気仙郡越喜来村  
で生まれる(現三陸町越喜来)

学歴 昭和十年三月 越喜来村尋常高等小学校卒

業

入隊 昭和十七年一月十日 秋田県北部第十七部

隊に入隊

四月 満州国牡丹江省観月台第十一国境守

備隊配属

二十年二月 牡丹江省綏陽第一二四師団通

信隊転属

七月 関東軍通信下士官候補者隊に派遣

日ソ戦開戦となり原隊復帰 八月十五日終  
戦まで交戦

終戦と共に横道河子より国境を越えてソ連国のグロ  
デコーボまで徒步行軍。抑留地ウスリースク、コムソ  
モリスクで強制労働に従事。

昭和二十三年七月舞鶴上陸 復員

その後、定置網漁場に水夫として従事

昭和二十九年十二月 越喜来郵便局に就職

昭和五十七年三月 定年となり退職

現在、町交通指導員として交通安全並びに交通事故  
防止と明るい町づくりに精進中

昭和五十七年四月より、三陸町・越喜来地区代議員  
として全抑協運動に参加

(岩手県 田辺 壮久)